

小野 あずさ

ツアーでの挑戦

インドの長旅から帰ってきて、休暇ボケの私を待っていたのは案の定、仕事の山でした。演劇ツアーのデザインの仕事が立て続けに入っているプレッシャーを肩に感じながら、机に向かいました。初めのツアーの照明プランのベースは、去年の間に作っておいたので、リハーサルをもう数回見た後に、少し手直しをするだけで大丈夫だと思っていました。しかし、今年再度見に行ったリハーサルでは、内容は同じものの、全体のシーンの雰囲気がガラリと変わっていました。この公演は、去年も実験的にツアーをしていたので、公演の照明データもそのツアー用にでき上がっていたのですが、今年のツアーが始まる前に、新しい役者、音楽家を迎え入れたため、去年の照明プランとデータを使い回すことは、ほぼ不可能になったわけです。また1から作り直すか！と開き直って、プラン制作に取りかかりました。

心配だったのが、ツアーに出る前のプロダクションウィーク(劇場をかりて、造り込む期間)、灯り作りの時間がスケジュール上、かなりタイトなことでした。とりあえず、仕込めるだけ仕込んで、使えなかったらカットしていけば良い。後は、試しながら、最高速度で卓に打ち込む。そのためには、自分が一番使い慣れている卓を用意してもらうことが必要でした。プログラマーに頼んでも良いのですが、細かいことまで試しながら打ち込むときは、人に説明しているよりも、自分で打ち込んでしまったほうが断然早い。Ion、Eosをリクエストしたのですが、貸し切った劇場にはElementがあるので、それでなんとかやってくださいということになりました。小〜中スケールのツアーだったので、予算を削ってみんなで頑張りましょうという雰囲気でした。



ETC Element

話は少し反れますが、イギリスの演劇劇場はETCの卓が大変多いです。このツアーは13の劇場を回りますが、そのうちの6劇場がETC(Gio, Ion, Element, Express)、2劇場がStrand 520、他の2劇場がZero88 Bullfrog、その他の劇場はGrandMA、Compulite、Jands Vistaでした。乗り打ちの日もあるので、卓も一緒にツアーしたほうがいいと、カンパニーに提案し、返って来た答えが、「7週間もETC卓を借りる予算はありません。」とのことでした。では、私がもっているChamsysのMagicQ USB-DMXドングルを貸しましょうか?と提案しましたが、結局、ElementからChamsysにascii(アスキー)のフォーマットでショーファイルを移すことが難しいことがわかりました。結果、時間も押していたし、Elementで組んだエフェクトもそのままそっくり再現できるといった理由で、ETCのNomadを知り合いから貸していただくことになりました。

asciiに対応している卓は新しいETCの卓(Gio, Eos, Ion, Element等)、Strand 300-500(via Showport)、GrandMA、Zero 88 (Leap Frog 48, Leap Frog 96 and Frog 2)、Compulite 4D(CompUSITT software をダウンロードすればasciiが読めるそうです)。Jandsはasciiを読み込まないと聞いていますが、新情報があれば是非教えてください。

フロッピーディスクしか受け付けない古い卓はoff-line editor上でasciiをコンバートしてキューリストを移行できるようです。しかし、ムービングやチェースが絡んでくると、データの移行はシンプルではなさそうです。

日本ではjasciiというコードを使っていると聞きました。日本のメーカーの卓を使う場合は、jasciiでキューリスト移行が簡単にできるようですが、jasciiをETC Ionにasciiとして読み込ませようとしたら、チャンネルのゲージは移行できたものの、fade timeは全て0になってしまったと、知り合いの日本人照明技術者の方がおっしゃっていました。データも言語と同じで、英語のような世界共通の言葉を話そうとするけれど、それでもニュアンスやイントネーションが国によって違ってくるのは、仕方のないことなのかもしれません。キューリスト、タイム、サブマスター、グループ、エフェクト、すべて理解してくださいね、といっても、相手(ほかの卓)の受け取り方や、文法がちょっと違うだけで、誤解を招くことが多々あります。世界共通データ言語が完全に統一される日は、一体来るのでしょうか…。



"I know all the secrets in my world"公演ツアー